

わが社の誇り

-65-

生前に寄り添って葬儀

故人をひつぎに納める納棺師として、人生最後の別れをサポートする。どういう生前を歩んだのか、一人一人に合った葬儀を企画している。

1995年、帯広市生まれ。帯広明星小、帯広第四中、帯広三条高卒。2014年に帯広公益社に入社した。両親が斎場を見学した際、同社の若手社員が誠実に対応している姿を見て感心し、就職を勧めた。当初は顧客対応や祭壇作りなどを担当、2年ほど前から納棺師を務めている。

納棺では仏衣への着替え、女性の化粧など一連の儀式を全て行う。最初はマネキンや社員の協力を得て1年ほど訓練した。特に難しいと感じるのは女性の化粧。写真を見たり、遺族か

ら聞き取ったりして、生前の顔に整える。遺族から故人の思い出話を聞き、思い出の品をひつぎに入れ、場所を訪れるなど、寄り添った対応を心掛ける。

「死は悲しいことだが、

明るく見送りたい人もいる。お客さまが求めている部分は見逃さず、さらに満足してもらえよう、自分のできることを考えている」と強調。やりがいを感じるのは感謝の言葉を伝える

帯広公益社

郷原拓人さん

納棺師として、故人と遺族の最後の別れをサポートする郷原さん



られたときで、「手を握ってありがとうと言ってくれたり、泣いて喜んでくれる人もいる」と語る。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、葬儀のスタイルは変わっている。「最初は悲しくても、最後に公益社で葬儀を挙げて良かったと思ってもらえるよう努力したい」と話している。

帯広市内で1人暮らし。ロボット家電が好きで、休日は新商品のチェックなどを楽しむ。25歳。(津田恭平)

親族からの指名も

佐藤一哉総務部次長の話
葬儀に参列した親族から指名されることもあり、心強い存在。納棺をやりたいと思ってもらえるよう背中を見せて、仕事を頑張ってもらいたい。

企業ファイル

昨年12月には大樹にも支店

1941年創業。本社は帯広市大通南8。渡邊一郎社長。従業員数は約70人。資本金3000万円。売上高は約14億円(2020年11月期)。管内で葬祭業を営み、本社のほか芽室、池田、幕別、大樹に支店を構える。大樹支店は昨年12月にオープン、霊安室も完備している。

